

作文部門

☆ 総評 ☆

当コンクールも回を重ね、この入賞作品集の総評が指導上の指針として生かされていることを実感しました。旅行記などのように、特別なことではなく身近な出来事を題材に取り上げた作品が多かったことは喜ばしいことでした。

その一方で、まがの影響からか、おきまりの表現を用いた作品も多く、全体的に見ると作文力が低下しているように思います。自分の気持ちに素直に、自然な表現をすることはよいのですが、小学校五年生以上ともなれば、感情に流されるのではなく、もう少し歩みこんで、物事を客観的にとらえ直してほしいと思います。また、もう一度、書き直すとさらによい作品になるでしょう。

今年は人物描写に優れた作品や、たんたんとした描写の中にも、書いた人の気持ちがよく表れている作品が多数見られたことが印象に残りました。

文部大臣奨励賞

「あれから早くも一年」

鹿児島県金峰町立金峰中学校

二年 濱崎 佳苗



去年の九月三日に襲来した台風十三号で、この金峰町では多くの人が犠牲となって、悲しみの涙を流した。あのときのことは今でも心に強く残っている。

真つ暗な空、雨戸をたたきつける強い風と雨でとても外には出られないというときに、扇山で土砂くずれが起きたという電話連絡が入った。午後二時頃のことだった。

消防士である父は急いで身支度を整え、あらしの中を消防分遣所に向かった。家に残った私たちは父のことが心配でたまらず、早く帰ってきてほしいという気持ちでいっぱいだった。

すっかり疲れはてた様子で父が帰ってきたのは、夜も十時頃だった。扇山では、そこに建っていた公民館も何もすべて土砂で埋まってしまい、見るも無惨な姿に変わりはてていたと話してくれたが、そのときは他人ごとみたいに耳を傾けていた。だが、次の言葉にびくつき、私は同じことを何度も父に聞き返した。土砂くずれで生き埋めになっている人の中に、同じクラスの畠ちゃんもいるというのだ。信じられない思いの私の口からは、「嘘でしょう。」

という言葉が自然に出ていた。畠ちゃんとは、畠中勝幸君がクラスの人々から呼ばれている愛称である。彼はいつもにこにこしている人だったがその反面、不正などを絶対に許さない正義感の強い人でもあった。

翌日の新聞に、この災害で亡くなられた二十一名の写真と変わりはてた扇山の写真が載った。その写真の中にはもちろん畠ちゃんの写真もあったのだが、それを見てもまだ彼の死が信じられなかった。学校に行くと、畠ちゃんの机には菊の花が置かれていた。まわりを見回すと、みんな畠ちゃんの死が信じられないという表情だった。夏休み前担任の永田先生が、

「みんな、夏休みの中に死ぬなよ。」と冗談半分に言われた言葉が思い出され、悔やしさと悲しさがこみあげてきた。

畠ちゃんが亡くなって数日後、永田先生が一枚のプリントを配られた。それは、国語の授業のときに畠ちゃんが書いた一編の詩だった。扇山の四季の移り変わりをうたったものだったが、その扇山は土砂で埋めつくされてしまったのだ。半月ほどしてからだったと思うが、永田先生とクラスの人々で災害現場に行き、線香をあげて冥福を祈った。辺りは、畠ちゃんの詩に出てくる彼岸花

読書感想文部門

☆ 総評 ☆

みなさんが書いた読書感想文を読んだ人が、「わたしもこの本を読みたい」と思ってくれたら、うれしいですね。あらすじをだらだらと書き続けて、自分の感想は最後に少しだけ、では、読む人に自分の感動は伝わりません。逆に、本の内容を全く書かないで、自分の感想だけを書いたのでは、どんな本を読んだのか、読む人にはよくわかりません。

読書感想文は、書き出しが勝負です。事実から書き出すのもよし、自分の体験から書き出すのもよし、情景から書き出すのもいいでしょう。読む人をひきつけるような書き出しになるように、工夫してみましょう。そのためには、自分がその本を読んでどんなことをいちばん強く感じたのかをはっきりさせて、全体の組み立てを考えることが大切です。

そして、感じたことを自分の手元までひきよせて、自分の言葉で書き表してみましよう。ほかの人が「読んでみたい」と思うようなすてきな本と出会うことを願っています。

文部大臣奨励賞

「ナバホ・インディアン

— 少数民族の人たちへ —

愛知県愛知教育大学附属岡崎小学校

五年 川辺 久美子



ナバホ・インディアン—私がこの名前を初めて知ったのは、名古屋のデパートで開かれた「大アメリカ祭」だった。会場の片すみで、おばあさんが色とりどりのもよう

があちこちにぼつぼつと咲いているだけで、大きな岩がごろごろとしており、赤茶色の土砂が山の上から大きな帯となって落ちこむなど、台風が残っていた爪跡がなまなましく残っていた。

台風十三号は、最大一時間雨量一四ミリ、一日総雨量二九ミリという記録的な豪雨であちこちに大きな災害をもたらしたが、もう二度とこういうことがあってほしくない。あの無惨な扇山を思い出すたびに、畠ちゃんの詩が思い出される。

野原はうたう

畠中 勝幸

野原はうたう

風にまぎれて

春はつくしが生え

たんぼが咲く

夏はせみが鳴き

チョウがまう

秋はひがな花が咲き

とんぼが飛ぶ

冬はみんな休む

森も 虫も 花も

だけど野原はうたう

風にまぎれて

あのいまわしい台風十三号が金峰町を襲ってから、早くも一年が過ぎようとしている。去る七月十日には、町内外数百人の手によって彼岸花の球根が植えられたが、台風の爪跡がまだ各所に残っているもの、着々と砂防工事が進められているのを見て、これで扇山の人々も安心して過ごせるなどほっとした。やがてこの工事も終わるだろうが、その頃には、暑い中みんなが真心こめて植えた彼岸花も満開となり、畠ちゃんを喜ばせてくれるだろう。

をしゅうたんに織りこんでいた。しんけんな目で、一生けん命織っている顔には、深いしわがきざみこまれていた。それは、アニーのおばあちゃんにそっくりだった。私は、「じゅうたんを織ったり、銀細工を作ったりして暮らしを立てているなんて貧しいんだな。」

と思った。でも、この物語を読んでいくと貧しく、そばくなナバホ・インディアン—の暮らしが、すごいことになってきた。人と自然が調和して暮らしている。木と土で作られたホーガンとよばれる家。羊を飼い、神のつかいのコヨーテを思う暮らし。家の中でたき火をたき、トウモロコシでパンを作る。必要とするものは、ほとんど自分たちで作る。家の周りにデパートやスーパーマーケット、商店街が立ちならび、ほしい物はお金ですぐ手に入る私の暮らしとは大違いだ。

その中でも、私が一番感動したのは、アニーのおばあちゃんの死をむかえる態度だ。だれでも死ぬのはこわい。私だってそうだ。自分が死ぬと分かったら、大さわざして泣いたりするだろう。でも、おばあちゃんは静かに自分の死が近いことを家族に告げる。

またふつうだったら、病院へ入り検査をくり返し、葉づけになって、死をおそれる。とても冷静になれないであろう。便利な物に囲まれて楽に暮らしているはずの私たちが、すべてを手で作らだしているナバホ族の人々より死に対しておだやかな心を持っていないのは、悲しいことだと思ふ。

「お日様は、朝、大地からのほり、夕方、大地にしずんでいく。生きていくものはすべて、大地からうまれて、大地へ帰っていくんだよ。」

というおばあちゃんの言葉に、私も、アニーと同よう、心を動かされた。命あるもの、いつかは死んでいく。それを、自然のなりゆきだからあたりまえと思うおばあちゃんとは、何だか神様のような。アニーが、スティックをすべらせ、じゅうたんを織り始めた時、アニーは、おばあちゃんの死を受け入れ、おばあちゃんに死んでも、おばあちゃんの生きていた時のようなすばらしいじゅうた

優秀賞

「ぼくの泳記念日」

福島県安達町立下川崎小四年 野地浩和

会話に方言を用いたり、たたみかけるように自分の気持ちを書き連ねたりと、文章に独特のリズムがあります。ブルーにいられたわけ、二年生の夏休みのことをふり返りながら、初めて二十五メートル泳いだときに頭の中を駆けめぐった思いや、その直後の周りの情景を鮮やかにえがいた作品です。

「祖父の死を見つめて」

東京都清明学園初等六年 木村麻衣

この作品は、家族みんなで病に冒された祖父を支えた闘病の記録ともいえます。文章の構成もよくまとまっており、祖父を思いやる作者の気持ちにじみ出ています。自らの死を見つめながら、一日一日を大切に生きた祖父の姿を忘れまいとする強い意志が感じられます。

「鶴園の小父さん」

鹿児島県金峰町立金峰中一年 堀木美保

父の友人である小父さんの人柄をよくとらえているため、文章表現が自分のものになっており、会話や人物描写から小父さんの生き生きとした姿が伝わってくる、楽しい作品です。鹿児島市内でのエピソードの部分がなければ、テーマがはっきりし、よりよいものになったと思います。

んを織り上げる決意を私は感じた。そして、こうやって、古い伝とうは、新しい者へ受けつがれ、絶えることがないんだなと思った。

インディアンを歴史を調べてみると、いろいろなことが分かってきた。

今までは、インディアンと云えば、弓を放ち、野ばんな行いで白人をおそう悪者というイメージだったが、最近、ちがう見方になってきている。つまり、インディアンこそが、自分たちの文化を持ち、以前からアメリカ大陸に住んでいた人たちだった。白人は後からやって来た。そして、南北戦争後、彼らを保留地に追いやった。

今でも、満足に学校へ行けず、社会的地位が低いそう。ほとんどの人々は、保留地でひっそりと自分たちの文化を守りながら生きているのだそう。そんな小さな民族がとて力強く生きぬいているのが、この本から伝わってきた。

二年前、家族で北海道旅行をした。大雪山のホテルで、私は生まれて初めてアイヌの人を見た。夜、アイヌ民族の歌やおどりのショーがあった。おばあちゃん、お父さん、お母さん、子供たち、家族で演じていた。アイヌ語も教えてくれた。後からロビーに行くと、お母さんが木ぼりのプローチ、ペンダント、キーホルダーなどを売っていた。八十四才になるおばあちゃん、おどりが大好きで、その夜おそくまで外の広場で盆おどりをおどっていた。このアイヌの人たちも、ナバホ族のような少数民族族だったんだと改めて分かった。この人たちも、ナバホ族と同様に、北海道のアイヌ部落でひっそりと暮らしているらしい。遠い国の話だと思っていたが、私の国日本にも同じような少数民族がいる。

私は、たまたまこの本に出会えて少数民族を知った。でも、同年齢の子たちのどれぐらいがこのことを知っているのだろうか。それに私もよくは知らない。日本やアメリカ合衆国以外の国にもいるかもしれない。まず、知ること―これが一番大事だと思う。次に、少数民族の人たちを理解し、助け合って仲よく暮らしていける社会を実現させることが大切だと強く感じた。



ナバホ・インディアンという言葉との出会い。この事実からの書き出しを、アニーのおばあちゃんのこと、ナバホ・インディアンを暮らしと自分の暮らしとの対比へと自然に続けています。そして、「アニーのおばあちゃんの死をむかえる態度」という自分の感動の中心が読む人に伝わるように、具体例を挙げながらいねいに書いています。インディアンのは話は簡略にまとめ、自分自身のアイヌの人たちとの出会いにふれることで、少数民族というテーマをより身近なものとして深めることができました。と思います。

文章全体の構成もすばらしく、川辺さんの文章力がきらりと光る作品です。

優秀賞

「ちいちゃんのかげおくりを読んで」

東京都昭島市立武蔵野小四年 鴨頭 輝

主人公のちいちゃんの気持ちをいねいに読み取ったうえで、自分の感じたことを素直に書き表している作品です。最後まであきらめないでかげおくりを最後まで読んでほしい。思いついたまま、なんで、死ななさいいけなないんだとさげびたいと感じる鴨頭君。「ちいちゃんのかげおくり」を忘れないで深く考えて生きていきたいという結びの言葉が印象的です。

「ガラスのうさぎ」を読んで」

東京都武蔵野東学園小五年 水野悠可里

自分と同じくらいの年齢である、主人公の敏子の苦しみや悲しみを水野さんは自分のことのように受け止めています。日本の五十年前の戦争をふり返ることで、現在の自分の生活をつめ直し、平和の意義を問うかけています。水野さんの「平和な幸せが地球上いっぱいに広がってほしい」という思いが伝わってくる作品です。

「屋根裏部屋の秘密を読んで」

東京都星美学園小六年 長谷川早苗

現在の日本の平和が、自分たちのおじいさんやおじいさんが若かったころの戦争という悲劇の上に成り立っていることを、「屋根裏部屋の秘密」という本から感じ取ったことで、長谷川さんにとて今年の八月十五日は特別な日になったようです。戦争のおそろしさを知り、自分たちの平和な未来を見つめようとする姿勢が伝わってきます。

その他の受賞作品

作文部門

◆優良賞 「あきがおみずやりだいほうけん」(福井大学教育学部附属小一年 仲村雅「わたしのいえのしごと」(豊橋市立大村小一年) 林舞美「赤ちゃんと生まれたよ」(愛知教育大学附属岡崎小二年) 名倉裕貴「はくくんのすきなお母さん」(古川市立古川第二小四年) 草刈克寛「米作りは大変だ」(宇ノ気町立宇ノ気小五年) 安田剛

「やもりをそだてるよ」岡崎市立三局小二年 西村亜沙美

「夏休みのお手つだい」岡崎市立連立小二年 赤松大輔「ババがなくなった」(秋田市立豊岩小三年) 佐藤若菜「勇樹君に会ったよ」

(古川市立古川第一小三年) 佐藤拓哉「はくくらの自然活動」(愛知教育大学附属岡崎小三年) 桑本哲平「ふしぎな謎の事」(愛知教育大学附属岡崎小四年) 小林浩生「私の名前」(愛徳学園小四年) 田

真緒「はくくの大」「ナナ」(愛知教育大学附属岡崎小五年) 大高秀介「おじいちゃんとの物干し作り」(安達町立下川崎小六年) 佐藤邦保「スズメと私の人生」(福井大学教育学部附属中一年) 永谷友希恵

読書感想文部門

◆優良賞 「大とろぼうくまさんをよんで」(大阪教育大学教育学部附属天王寺小一年) 中尾聡一「こひつじクロ」をよんで」(大阪教育大学教育学部附属天王寺小一年) 松本紗季「アニーとおばあちゃんをよんで」(千葉大学教育学部附属小四年) 角野愛「少年の海―それぞれの海に向かって―」(市川市立中山小五年) 高梨英次郎

「過去を愛する―海図の図」を読んで」(大阪教育大学教育学部附属天王寺中三年) 三木千夏

◆佳作 「ヘレン・ケラーをよんで」(福井大学教育学部附属小一年) 船島誠子「おにたなくへ」(福井大学教育学部附属小一年) 下江麻衣「いい人になつた大とろぼうくまさん」(岐南町立北小一年) 片桐恵子「こひつじクロ」をよんで」(大阪教育大学教育学部附属天王寺小二年) 岡島圭一郎「森に生きている」を読んで」(星美学園小三年) 榎谷愛理「はしとたんぼば」(愛知教育大学附属岡崎小三年) 山本晶子「ナオミの道」を読んで」(愛徳学園小五年) 青木希美「かきりなくさしい花々」を読んで」(愛徳学園小五年) 柿田真美子「車輪の下」ハンスの一生から思うこと」(岐阜市立長良中一年) 山田陽介「きょうを大切に」「いまを生きている」を読んで」(大阪教育大学教育学部附属天王寺中二年) 吉田千絵「山月記」を読んで」(広陵町立広陵中二年) 小川秀人

学校賞受賞校

◆優秀学校賞 岐阜県・柳津町立柳津小学校

◆優良学校賞 新潟県・新潟大学教育学部附属新潟小学校

東京都・東京学芸大学附属小金井小学校 愛知県・愛知教育大学附属岡崎小学校

◆学校奨励賞 東京都・星美学園小学校 大阪府・大阪教育大学教育学部附属天王寺小学校 東京都・東京学芸大学附属小金井中学校 岐阜県・岐阜市立長良中学校